

平成22年度沖縄群島病害虫発生予報第8号(11月予報)

11月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	60	40	30
平年並	30	40	30
低い(少ない)	10	20	40

(平成22年10月22日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温()	最高気温()	最低気温()	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	21.7	24.2	19.5	124.1	120.9

(沖縄気象台発表・統計期間1971～2000・資料年数30年)

11月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

生育初期におけるメイチュウ類の防除対策

- a 10月下旬の調査の結果、新植夏植圃場における芯枯茎率は1.3%(平年0.5%)と平年より高かった。
- b ふ化した幼虫は、苗の葉裏および葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯を起こさせ茎を枯死させる。
- c 生育初期の加害による芯枯防止をねらい、食入初期の幼虫を対象にした防除を行う。
- d 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選定し施用する。

野その防除対策について

- a 10月下旬の調査の結果、被害茎率は0.1%であった。
- b 今後のブリックス上昇に伴い加害が予想されることから、地域単位で一斉防除を実施する。
- c 畜舎や野そが水飲み場として利用する用水路等の周囲の圃場での被害が多い傾向にあるので、それらの場所では重点的に防除を行う。

2 かんきつ(タンカン、シークワサー)

かいよう病の防除対策

- a 10月下旬の調査の結果、発病葉率はタンカンでは15.3%(平年12.0%)、シークワサーでは34.7%であった。
- b 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か平年より多くなる確率が40%と予想されており、本病の発生が助長されやすい。
- c 本病の病原菌は雨で伝搬し、風によって飛散、侵入が促進され、また夏葉～秋葉で発生が多くなるが、近年は特にシークワサーでの被害が顕著になっている。
- d 秋芽の罹病枝を取り除く。

3 かぼちゃ

定植時および生育初期の防除対策

- a 例年この時期には、ウイルス病を媒介するアブラムシ類をはじめ、コナジラミ類、ハモグリバエ類などの被害が見られる。
- b アブラムシ類の飛来侵入を防止するため、畦ごとに防風ネットを設置するか、防虫ネットによるトンネル被覆を行う。
- c ウイルス病に感染した株は抜き取って圃場外に持ち出し処分する。健全株への感染を防ぐため、抜き取りは他の管理作業の終了後に行う。
- d 病害虫の発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- e 定植時に粒剤を施用する。

4 にがうり(施設)

定植時および生育初期の防除対策

- a 例年この時期には、ウイルス病を媒介するアブラムシ類、アザミウマ類をはじめ、コナジラミ類やつる割病、うどんこ病などの被害が見られる。
- b 防虫ネットやビニールは必ず定植前に被覆し、健全苗を植え付ける。
- c 過去につる割病の被害が見られた圃場では、接木苗を用いる。
- d うどんこ病は多発すると防除が困難になるので、葉をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。
- e 誘引ネットより下の側枝や葉、圃場内外の雑草は、病害虫の発生源となるので除去する。
- f 定植時に粒剤を施用する。
- g ウイルス病に感染した株は抜き取って圃場外に持ち出し処分する。また、媒介虫であるアブラムシ類、アザミウマ類の薬剤による防除を行う。
- h 平成22年度病害虫発生予察技術情報第4号(平成22年9月2日付)参照。

5 小ぎく(年末出荷用)

黒斑病、褐斑病の防除対策

- a 10月の調査の結果、黒斑病、褐斑病の発生圃場率は27.8%、被害葉率は4.6%であった。
- b 一部圃場で多発が見られた。
- c 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か平年より多くなる確率が40%と予想されており、本病の発生が助長されやすい。
- d 発病葉や摘葉等による残渣は、発生源となるため圃場の外に持ち出し処分する。
- e 多発すると防除が困難となるため、発病初期の薬剤防除を徹底する。

アザミウマ類の防除対策

- a 10月の調査の結果、アザミウマ類による葉の被害がみられ、被害圃場率は77.8%(前年50.0%)、被害茎率は28.6%(前年22.8%)で、前年同様被害が多い。
- b 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- c 虫見板等により早期発見し、早期防除に努める。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので同系統薬剤の連用を避ける。
- e 定植時には粒剤を施用する。

ハダニ類の防除対策

- a 10月の調査の結果、ハダニ類の寄生がみられ、発生圃場率は38.9%(前年33.3%)、寄生茎率は3.6%(前年9.1%)であった。
- b 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- c 多発すると防除が困難になるので早期発見・早期防除に努める。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので同系統薬剤の連用を避ける。